

平成28年度文書館古文書実践講座（1班）

「永敏卿負傷見舞状」

—負傷した大村益次郎への御見舞の手紙—



目次

| | | |
|------------------|-------|---|
| 目次 | | 1 |
| 解説 | | 2 |
| 「永敏卿負傷見舞状」収録書状一覧 | | 4 |
| (1) | | 6 |
| (2) | | 7 |



箱に納められた状態の「永敏卿負傷見舞状」(上の4巻)

解説

平成28年度、古文書実践講座1班は、当館蔵・大村益次郎文書No. 42～45「永敏卿負傷見舞状」をテキストとした。これは、明治二年（一八六九）九月四日、兇徒に襲われ重傷を負った大村益次郎（永敏）に宛て、大村と関係の深い諸氏が彼に送った見舞状である。九月十日から十月二十七日までの書状三九通が四巻に仕立てられている（後掲「永敏卿負傷見舞状」収録書状一覧（1）参照）。

明治二年七月八日の官制改革により明治新政府内に兵部省が新設されると、戊辰戦争で多大な功績のあった大村益次郎が兵部大輔に任命された。大村は同省の実質的トップとして新政府の軍制改革に着手するが、その改革方針（徴兵制に基づく政府直属軍の創設、軍制の統一など）には反対勢力も多かった。同年九月四日、大村は滞在先の京都で八名の兇徒に襲撃される。同席していた静間彦太郎（長州藩大隊司令）や安達幸之助（英学教授）は命を落としたが、大村は奇跡的に一命を取り留めた。一時は回復すると思われたものの、次第に病状は悪化し（敗血症）、蘭医ポードウインらの治療の甲斐もなく、大村は十一月五日死去した。享年四五歳。

書状は、大村の上司である兵部卿仁和寺嘉彰親王、部下である兵部省大丞・小丞（河田佐久馬・船越衛・石井寅之助他）など兵部省

関係者からのものが多い。長州出身者の書状には、参議広沢真臣、京都府権大参事榎村正直、富永有隣、大津唯雪、長松幹らのものがある。また三河重原藩知事板倉勝達の書状もみえ、大村をめぐる人間関係がうかがわれる。

時期的に最も早いものは九月十日付けの書状で、兵部省（No. 2）、広沢真臣（No. 13）、水戸藩出身の香川敬三（No. 25）らが同日付の見舞状を送っている。以後諸氏の書状の多くは、事件への驚き、犯人への怒りを綴るとともに、大村の身体を案じ、静養に努め一日も早い回復を願う内容となっている。最も遅いものは十月二十七日付けである。その一通、兵部卿仁和寺嘉彰親王の書状（No. 33）では、大村の症状が悪化したとの知らせを受け、「不堪驚愕」との言葉がみえる（後掲「永敏卿負傷見舞状」収録書状一覧（2）参照）。

各書状には、犯人探索に関する記述（No. 3・8・11・37）、新政府内で蘭医ポードウインに関する記述（No. 3・8・11・37）、新政府内での軍制改革の議論に関する記述（No. 29・32）などが若干ながらみえる。また、長州出身で鳩居堂弟子の中嶋四郎が、滋養のため「豚脂」（豚脂・ラード）を大村に送っており興味深い（No. 23）。

なお、書状は四巻に成巻されているが、各巻に規則性（成巻のルール）は見出せない。

【参考文献】

大村益次郎先生伝記刊行会編『大村益次郎』（マツノ書店 復刻一九九九年）

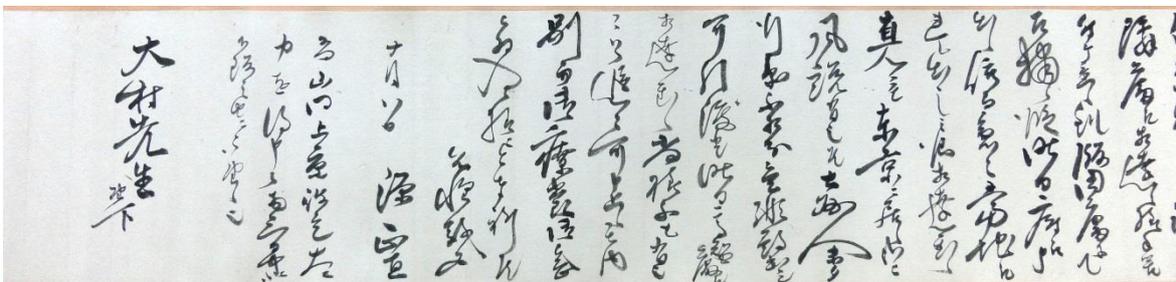
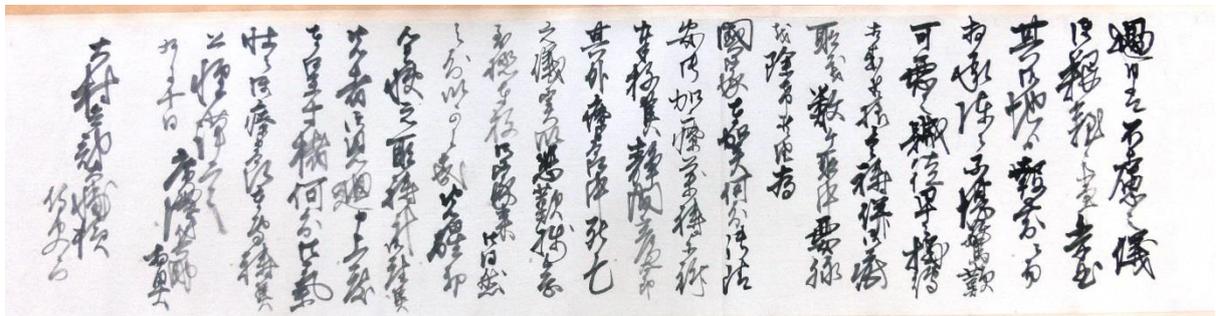
山本栄一郎著・大村益次郎没後一五〇年事業実行委員会編『幕末維新の仕事師「村田蔵六」 大村益次郎』（二〇一六年）

○平成28年度古文書実践講座1班 受講生

中村省一・山本公吉・斎藤美穂子・坪内以延・山中トシ子（順不同）

〈サポート〉

山崎一郎・和田秀作・吉積久年（山口県文書館）



〈上〉 広沢真臣書状

〈下〉 榎村正直書状（部分）

「永敏卿負傷見舞状」収録書状一覧(1) (全書状を卷子ごと順番通り配列)

| 請求番号 | No. | 月日 | 書状差出者名 *()内は補注 | 差出者肩書・役職等 *()内は補注 | 差出者備考 | 宛名表記 | 頁数 |
|------|-----|--------|--------------------|-----------------------|-------------------------|----------|----|
| 42 | 1 | 9月14日 | 石井富之助(靄吉) | 兵部権少丞 | 佐賀藩出身。 | 大村兵部大輔殿 | 8 |
| 42 | 2 | 9月10日 | 兵部省 | 兵部省 | | 大村兵部大輔殿 | 8 |
| 42 | 3 | 10月8日 | 源正直(楨村正直) | (京都府権大参事) | 長州藩出身。 | 大村先生 | 9 |
| 42 | 4 | 10月27日 | 兵部少輔 | 兵部少輔 | | 兵部大輔殿 | 10 |
| 42 | 5 | 9月14日 | 兵部卿(仁和寺宮嘉彰親王) | 兵部卿 | | 兵部大輔殿 | 10 |
| 42 | 6 | 9月17日 | 有隣(富永有隣) | | 長州藩出身。 | 大村君 | 11 |
| 42 | 7 | 10月12日 | 唯雪(大津唯雪カ) | (京都公用人) | 長州藩出身。村田清風次男 | 大邨老人 | 12 |
| 42 | 8 | 9月晦日 | 深瀬仲磨(深瀬仲磨) | | 大和十津川出身。 | 大村賢君 | 12 |
| 42 | 9 | 9月27日 | 兵部省大少丞 | 兵部省大少丞 | | 大村兵部大輔殿 | 13 |
| 42 | 10 | 9月23日 | 板倉勝達 | (三河)重原藩知事 | | 大村兵部大輔殿 | 14 |
| 43 | 11 | 10月27日 | 石井兵部権少丞(石井富之助) | 兵部権少丞 | 佐賀藩出身。 | 大村兵部大輔殿 | 14 |
| 43 | 12 | 10月27日 | 平尾兵部権少丞 | 兵部権少丞 | | 大村兵部大輔殿 | 15 |
| 43 | 13 | 9月10日 | 広澤兵助(広澤真臣) | (参議) | 長州藩出身。 | 大村兵部大輔殿 | 15 |
| 43 | 14 | 17日 | 横山幾太 | | 長州藩出身。四境戦争(芸州口)や戊辰戦争参戦。 | 大村益次郎様 | 16 |
| 43 | 15 | 10月24日 | 河田兵部大丞(河田佐久馬・景與) | 兵部大丞 | 鳥取藩出身。 | 篠田竹蔵 | 17 |
| 43 | 16 | 9月11日 | 洋之助(船越衛) | (兵部権大丞) | 広島藩出身。 | 大村先生 | 17 |
| 43 | 17 | 9月26日 | 足立勘四郎 | | 鳥取藩出身・足立長郷カ。 | 大村大先生公 | 18 |
| 43 | 18 | 10月22日 | 井上金郎直貞 | | | 大村益次郎様 | 18 |
| 44 | 19 | 9月14日 | 増田少丞 | (兵部)少丞 | | 大村兵部大輔殿 | 19 |
| 44 | 20 | 9月13日 | 岡本孝承 路之助事 | | 上州館林出身。 | 大輔様 | 20 |
| 44 | 21 | 10月17日 | 良輔 | | | 大村先生 | 20 |
| 44 | 22 | 9月10日 | 長松文輔(長松幹) | | 長州藩出身。 | 大村兵部大輔様 | 20 |
| 44 | 23 | 9月11日 | 中嶋四郎(佐衡) | | 長州藩出身。鳩居堂弟子。 | 大村先生 | 21 |
| 44 | 24 | 9月17日 | 桜井慎平(真養) | | 長州藩出身。集義隊・鋭武隊士。 | 大村先生 | 21 |
| 44 | 25 | 9月10日 | 香川敬三 | | 水戸藩出身。 | 大村先生閣下 | 22 |
| 44 | 26 | 10月19日 | 三宮兵部権少丞(三宮義胤カ) | 兵部権少丞 | 近江出身。 | 大村兵部大輔殿 | 23 |
| 44 | 27 | 9月10日 | 嘉三郎(田邊嘉三郎カ) | | 田邊嘉三郎は元集義隊士。田邊正義。 | 大村兵部大輔殿 | 23 |
| 44 | 28 | 10月14日 | 小沢武雄 | | 豊前国小倉出身。 | 大従四位様 | 24 |
| 45 | 29 | 10月19日 | 敬三・洋之助(香川敬三・船越洋之助) | | | 兵部大輔公 | 25 |
| 45 | 30 | 9月10日 | 大久保忠尚・桑原虎次郎・富士武丸 | 東京詰合 報国・赤心 両隊惣代 | | 大村兵部大輔殿下 | 27 |
| 45 | 31 | 9月10日 | 堀江権大録春野 | 堀江権大録 | | 大村兵部大輔様 | 27 |
| 45 | 32 | 9月24日 | 三宮耕庵 | | | 大村大先生公 | 28 |
| 45 | 33 | 10月27日 | 嘉彰(仁和寺宮嘉彰親王) | (兵部卿) | | 兵部大輔閣下 | 29 |
| 45 | 34 | 9月13日 | 平尾伴之允良熙 | | | 大村兵部大輔様 | 29 |
| 45 | 35 | 9月17日 | 数馬 | | | 益次郎様 | 30 |
| 45 | 36 | 10月19日 | 佐藤嘉七郎(金義) | (兵部権大録) | 東京出身。 | 大邑大先生 | 30 |
| 45 | 37 | 10月 | 増田少丞 | (兵部)少丞 | | 大村兵部大輔様 | 31 |
| 45 | 38 | 9月14日 | 久我陸軍少将 | | | 兵部大輔様 | 32 |
| 45 | 39 | 10月9日 | 亮吉(西村亮吉カ) | | 土佐藩出身。 | 大村先生 | 32 |

注:「請求番号」は大村益次郎文書の番号/「No.」は最初の書状から通番で便宜的に付した数字/「頁数」は本冊子での該当ページを示したものの。

「永敏卿負傷見舞状」収録書状一覧(2)

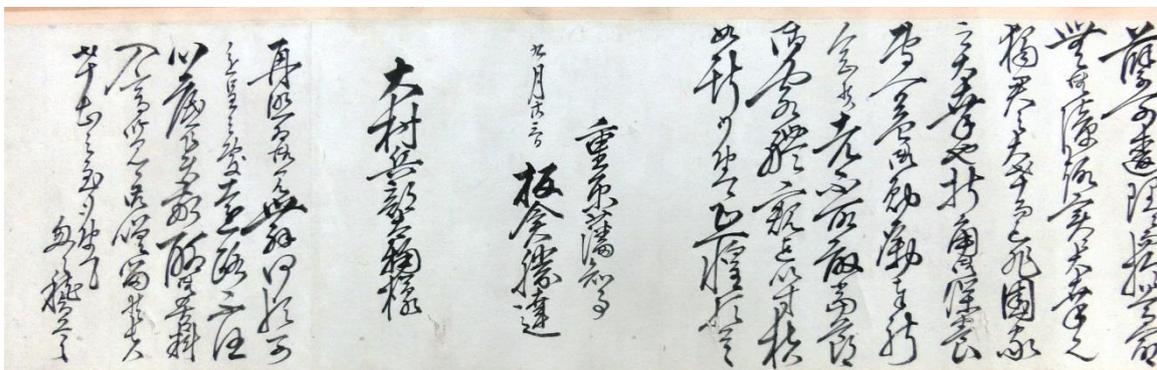
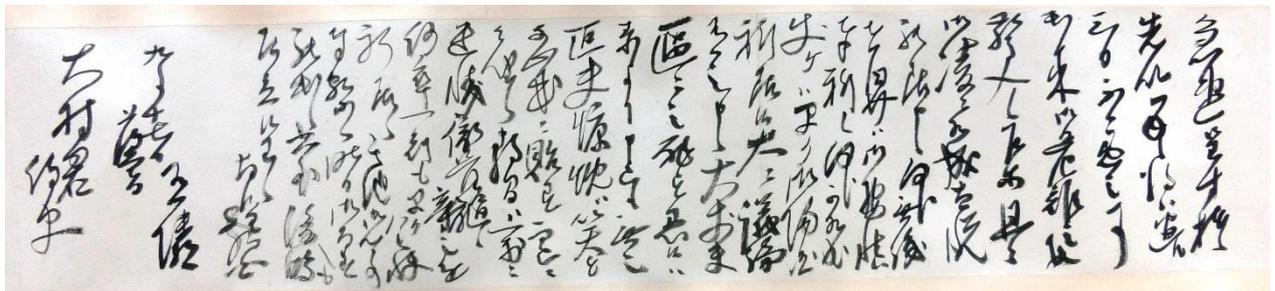
(全書状を月日順に配列)

| 請求番号 | No. | 月日 | 書状差出者名 *()内は補注 | 差出者肩書・役職等 *()内は補注 | 差出者備考 | 宛名表記 | 頁数 |
|------|-----|--------|--------------------|-----------------------|-------------------------|----------|----|
| 42 | 2 | 9月10日 | 兵部省 | 兵部省 | | 大村兵部大輔殿 | 8 |
| 43 | 13 | 9月10日 | 広澤兵助(広澤真臣) | (参議) | 長州藩出身。 | 大村兵部大輔殿 | 15 |
| 44 | 22 | 9月10日 | 長松文輔(長松幹) | | 長州藩出身。 | 大村兵部大輔様 | 20 |
| 44 | 25 | 9月10日 | 香川敬三 | | 水戸藩出身。 | 大村先生閣下 | 22 |
| 44 | 27 | 9月10日 | 嘉三郎(田邊嘉三郎カ) | | 田邊嘉三郎は元集義隊士。 田邊正義。 | 大村兵部大輔殿 | 23 |
| 45 | 30 | 9月10日 | 大久保忠尚・桑原虎次郎・富士武丸 | 東京詰合 報国・赤心 両隊惣代 | | 大村兵部大輔殿下 | 27 |
| 45 | 31 | 9月10日 | 堀江権大録春野 | 堀江権大録 | | 大村兵部大輔様 | 27 |
| 43 | 16 | 9月11日 | 洋之助(船越衛) | (兵部権大丞) | 広島藩出身。 | 大村先生 | 17 |
| 44 | 23 | 9月11日 | 中嶋四郎(佐衡) | | 長州藩出身。鳩居堂弟子。 | 大村先生 | 21 |
| 44 | 20 | 9月13日 | 岡本孝承 路之助事 | | 上州館林出身。 | 大輔様 | 20 |
| 45 | 34 | 9月13日 | 平尾伴之允良熙 | | | 大村兵部大輔様 | 29 |
| 42 | 1 | 9月14日 | 石井富之助(靄吉) | 兵部権少丞 | 佐賀藩出身。 | 大村兵部大輔殿 | 8 |
| 42 | 5 | 9月14日 | 兵部卿(仁和寺宮嘉彰親王) | 兵部卿 | | 兵部大輔殿 | 10 |
| 44 | 19 | 9月14日 | 増田少丞 | (兵部)少丞 | | 大村兵部大輔殿 | 19 |
| 45 | 38 | 9月14日 | 久我陸軍少将 | | | 兵部大輔様 | 32 |
| 42 | 6 | 9月17日 | 有隣(富永有隣) | | 長州藩出身。 | 大村君 | 11 |
| 44 | 24 | 9月17日 | 桜井慎平(真養) | | 長州藩出身。集義隊・鋭武隊士。 | 大村先生 | 21 |
| 45 | 35 | 9月17日 | 数馬 | | | 益次郎様 | 30 |
| 42 | 10 | 9月23日 | 板倉勝達 | (三河)重原藩知事 | | 大村兵部大輔殿 | 14 |
| 45 | 32 | 9月24日 | 三宮耕庵 | | | 大村大先生公 | 28 |
| 43 | 17 | 9月26日 | 足立勘四郎 | | 鳥取藩出身・足立長郷カ。 | 大村大先生公 | 18 |
| 42 | 9 | 9月27日 | 兵部省大少丞 | 兵部省大少丞 | | 大村兵部大輔殿 | 13 |
| 42 | 8 | 9月晦日 | 深瀬仲磨(深瀬仲磨) | | 大和十津川出身。 | 大村賢君 | 12 |
| 42 | 3 | 10月8日 | 源正直(榎村正直) | (京都府権大参事) | 長州藩出身。 | 大村先生 | 9 |
| 45 | 39 | 10月9日 | 亮吉(西村亮吉カ) | | 土佐藩出身。 | 大村先生 | 32 |
| 42 | 7 | 10月12日 | 唯雪(大津唯雪カ) | (京都公用人) | 長州藩出身。村田清風次男 | 大邸老大人 | 12 |
| 44 | 28 | 10月14日 | 小沢武雄 | | 豊前国小倉出身。 | 大従四位様 | 24 |
| 44 | 21 | 10月17日 | 良輔 | | | 大村先生 | 20 |
| 44 | 26 | 10月19日 | 三宮兵部権少丞(三宮義胤カ) | 兵部権少丞 | 近江出身。 | 大村兵部大輔殿 | 23 |
| 45 | 29 | 10月19日 | 敬三・洋之助(香川敬三・船越洋之助) | | | 兵部大輔公 | 25 |
| 45 | 36 | 10月19日 | 佐藤嘉七郎(金義) | (兵部権大録) | 東京出身。 | 大邑大先生 | 30 |
| 43 | 18 | 10月22日 | 井上金郎直貞 | | | 大村益次郎様 | 18 |
| 43 | 15 | 10月24日 | 河田兵部大丞(河田佐久馬・景與) | 兵部大丞 | 鳥取藩出身。 | 篠田竹蔵 | 17 |
| 42 | 4 | 10月27日 | 兵部少輔 | 兵部少輔 | | 兵部大輔殿 | 10 |
| 43 | 11 | 10月27日 | 石井兵部権少丞(石井富之助) | 兵部権少丞 | 佐賀藩出身。 | 大村兵部大輔殿 | 14 |
| 43 | 12 | 10月27日 | 平尾兵部権少丞 | 兵部権少丞 | | 大村兵部大輔殿 | 15 |
| 45 | 33 | 10月27日 | 嘉彰(仁和寺宮嘉彰親王) | (兵部卿) | | 兵部大輔閣下 | 29 |
| 45 | 37 | 10月 | 増田少丞 | (兵部)少丞 | | 大村兵部大輔様 | 31 |
| 43 | 14 | 17日 | 横山幾太 | | 長州藩出身。四境戦争(芸州口)や戊辰戦争参戦。 | 大村益次郎様 | 16 |

注:「請求番号」は大村益次郎文書の番号/「No.」は最初の書状から通番で便宜的に付した数字/「頁数」は本冊子での該当ページを示したものの。

凡例

- 一、当史料は、平成28年度、山口県文書館古文書実践講座第1班が解読したものである。
- 一、漢字は原則として常用漢字を使用した。
- 一、変体仮名及び慣用的合字は、「江」(え)、「而」(て)、「者」(は)を除いて、原則として平仮名に改めた。
- 一、適宜、読点および並列点を付した。
- 一、改行は原則として原本のままとしたが、意味をとりやすくするため改めた場合もある。
- 一、説明として加えた傍注は()で示した。
- 一、文書の上書など、本紙と区別される部分は「」でくくり、(上書)と傍記した。
- 一、本文右上に小活字()書きで付した数字は、講座で用いたテキストの頁数を示している。頁の区切りには破線を入れた。
- 一、解読にあたり意見の分かれた箇所については、適宜該当部分の写真を挿入した。
- 一、明らかに書き手が文字を書き間違えたと考えられる箇所について、確認の意味で写真を挿入したことがある。



〈上〉 富永有隣書状

〈下〉 板倉勝達書状(部分)

永敏卿負傷見舞狀

(卷子題箋)

永敏卿負傷見舞狀 四卷之内

①

①

九月十四日

兵部權少丞
石井富之助
(露書書狀)

② 一筆奉啓上候、日増

秋冷、愈御全盛可

被成御奉務奉欣

賀候、就而者今月四日

夜狼藉等乱入之

赴承り始而奉驚踊候、

何者之仕業ニ而有之候哉、

実ニ不奉憚

③

朝威、暴動至極絶

言語憤怒徹骨髓候、

彼者共も何江逃去候も

天罪難遁、分草而も

探出し処嚴刑度、就中

手掛りも少々有之候得者

不日ニ相知れ可申と奉愚

④

考候、此地ニも種々分手

遂探索候間、左様思

召可被成下候、第一

御痛体者如何被為

御座在候哉、実ニ

為

朝廷御全快之程

⑤ 偏ニ奉神祈候、随分

御養療御專一二奉

存候、右者取急御見

廻旁奉呈愚札候、

⑥ 書余可奉期後

鴻候、恐惶謹言、

九月十四日

石井富之助

大村兵部大輔殿

○

⑦

九月十日

去四日不慮之

異変出来之趣、

何共驚愕之至ニ

兵部書狀

奉存候、乍併御身

之上ニ於テ御別条無

之趣先以一同安

⑧

堵仕候、此上申上候迄も

無之、呉々御療

養專一二奉存候、此

段得貴意度

如此ニ御座候、屯首

⑨

九月十日 兵部省

大村兵部大輔殿

○

③ 十月八日 一翰奉呈候、先以御

京都府権大 参事・榎村 船中其外聊無御支、

正直書状

⑩

ボドウィン 過ルニ日浪花御着、蘭医ボドウィン 鵬氏

速ニ御診察仕、追々

御療治日増御快然之趣、

兵部省作事 (元奇兵隊士) 取締・篠田 篠田武蔵申越天二安

武蔵武彦

悦仕候、当地も都合

⑪

相替儀も無御座、過ル

四日之夜大仏智積院内

出火、土州陳所ニ而彈葉

置付有之、暫時ニ相発

猛烈之響如大砲、兼而

世上投書張紙等も有之、

市民恐怖之央、

中宮御所行啓前夜と云、

⑫

到而人氣ニ触候得とも、

素より怪敷儀も無御座

早々鎮火ニて縁等も

相分り全く失火ニ相違

なく候、扱亦先月四夜之

乱暴人之内、関島金一郎

と申もの、同月十二日越前

府中にて召捕之四賊

⑬

京着之模様を聞、直ニ

脱走いたし候処、此賊ハ

元信州産之事ニ而、

伊奈県江手配仕置、

隣藩江相達候様手筈

付ケ置候処、飯田藩にて

召捕候段、昨日府江申

関島金一郎

出候、依而急々当地江

⑮

連レ出し之儀相達置候、

(神代直人)

直人も東京二居候哉二

神代直人

風説有之候、土州人未夕

行衛不相分、是非尋出シ

(高知)

可引渡と昨日高智藩江

相達置候、尚様子も有之

候ハ、追々可申上候、其内

別而御療養御念

⑯

被為入候様ニと奉祈候

恐惶敬白、

(權村正直)

十月八日 源 正直

山田顯義

(山田顯義)

尚山田上京彼是夫二

力を得申候、西二日中二ハ

下阪之由ニ御座候也

大村先生 座下

⑰

〔上書〕

源 正直

○

追而呉々も御保養

十月二十七日

兵部少輔書状 專一奉祈候也

過日来御病症

之處、此節甚

御困り之御様子

相伺痛心之至候

不日御快方トハ存候

江共、頃日御尋と

⑱

三宮 田辺

嘉三郎

して三宮・田辺等

差出候、委細ハ嘉三郎江

申聞置候間、御聞

取可被下候、呉々も御

大事御保養祈

⑲

入候、書状却而御面

働荒申入候、草々、

十月廿七日

〔上書〕

謹封

兵部大輔殿

呈侍史中

兵部少輔

○

〔5〕 九月十四日 一別以来意外二

兵部卿・仁

和寺宮嘉彰

親王書状

御不音打過可給

仁恕候、秋冷増

加候処、弥御安全

令賀候、扱過日ハ
不慮之異変卒
然ニ出来、御重傷

(20) 御難洪之旨去ル

八日伝承、誠

以驚人候、嘸御難

洪之段致遥察、

如何之御容

体ニ候哉、日々心

痛罷在候、何

(21) 分御保養專一祈

静間彦太郎 事候、就而者静(静間彦太郎)

安達幸之助(安達幸之助) 間・安足等ニも不幸ニシテ

遂ニ及落命候

趣、実ニ気毒之

至候、只先生

御登足後、

(22) 政府日々所謂因

循ニ陥リ奮気

無之遺憾之至候、

何卒先生御

快氣之上、一日も早く
御出仕ニ相運ヒ
候様為天下所

(23) 祈候、先ハ不取

敢御見舞迄

呈一書候也、

謹言

九月十四日

(24) 「墨引」

兵部大輔殿

兵部卿(仁和寺宮嘉彰親王)

○

(25) 九月十七日 急速呈寸楮

先以承候得ハ、過ル

三日不慮之事

出来御危難之段

驚人候、乍尔且々

御凌ニ相成太悦

罷居申候、何分無傍(全一記野真参思)

世界ハ御要慎(用心)

奉祈候、何分可相成

丈ケハ早ク御帰国



祈居候、大二議論

有之申候、大丈夫

区々之恥を忍候ハ

素より申迄も無之、

匹夫慷慨ハ以天を

歪曲ニ貽す而已ニ

御座候、（静蘭彦太郎） 静間ハ万々

遺情徹骨髓候、（安達幸之助） 幸之進

何卒一刻も早く全快

祈居候、其他御心事

奉察候、昨日御るすへも

罷出候、書外後鴻

存立呈候、恐惶敬白、

九月十七日 薄暮

大村君

侍史

○

〔27〕
十月十二日 冷気日々相増
京都公用人、
天津唯雪状 候得共、益御多福

奉相賀候、御下坂後

の御容体承り

拳而歡申候、幾心も

〔28〕

御加養肝要

奉存候、不遠

御見舞旁

罷下り度相含

片岡傳之助 居候、書外片岡江

相託カ、下記写真参照
相託候間御聞取

〔29〕
可被下候、先者

御見廻の為如此

御座候、草々屯首

十月十二日朝

（上書）
〔墨引〕

大邸老大人

至以下

〔30〕
過日者御不慮

九月晦日
深瀬仲慶景 之儀何共奉

恐入候、乍併天

之配ノ助敷、左程

之御事も無

御座、不日御全

〔31〕
快之趣ボードエン・

ボードウン
緒方洪哉 緒方君より拝



承仕候而案心

致、緒方陰居并(續方洪哉)

緒方洪哉
玄番君・ボードエン
ボードウイン

始可相成者御下坂

何卒御加

養被遊度候

様申上頁候趣

田中藤
委細田中益雄

君江申置候、尚

復東京ニ而船越(船越衛)

船越洋之助
洋之助殿御容

体篤と相窺

呉候様被申

聞、何卒

可相成者拝顔

之上口陳被仰

付度如何御

座候哉、不取

敢以書中、恐

惶敬白、

九月晦日

深瀬仲磨(ママ、仲磨)



大村賢君

閣下

○

〔9〕

九月十七日 聖上益御機嫌

兵部省大小丞書状
克被為渡、恐悅此

事二御座候、省

中一同無事御放

念可被下候、扱先生

御傷所如何御座

候哉、極而追日御

快方ニ可有之と奉存候

兎角内外多

忙、確ニ御尋も不致

頗ル不本意之事、

万御海容可被下候、

先般曾我隼三

兵部少丞
曾我隼三

上京致候二付、巨細

御聞取被下候事被奉

存候、何分御半快一

日も早く御上京是

而巳奉禱候、先者

右御容体御伺候迄

如是御座候、勿々頓首、

九月廿七日

兵部省大小丞

大村兵部大輔殿

○

〔10〕
九月二十日 已来絶御音信候二付、
重原藩知事
板倉勝達状 既二一書東京江欲發

候処、何日御発途と見候、

遙聞過日於西京、罹

御災難と奉驚愕候、

如君勤勞

王事且潔白者古今稀

皆人所知也、定而今般之

事件者必然行違より

起候義と權察候得共、甚

遺憾之至奉存候、併天

擊可違理二而、於尊命

無御障趣実二大幸也、

独君之大幸而已非国家

之大幸也、折角御保養

專一益御勉励奉祈

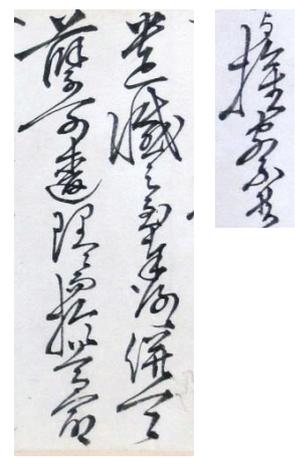
念候、先不取敢当節

御容体窺迄以寸楮

如斯御座候、恐惶頓首、

九月廿三日 重原藩知事
板倉勝達

大村兵部大輔様



〔43〕
再啓、為御見舞何類可
進呈之処、遠路不任

心底、乍失敬聊御肴料

入高覧候、御嗟留候者

幸甚之至御座候、

勿々禮首、

○

〔卷子題箋〕

永敏卿負傷見舞状 四卷之内

大村益次郎
文書43

〔11〕
十月二十日

兵部權少丞
石井重之助書

追日寒氣相募り

候処、今程御容

体如何被為在御座候哉

そののミ省中

〔44〕
案痛罷在候、過日

ボドウィン
より御下坂二而ホートイン

診察之上二而者、御療

治二者御不足者有
御座間敷と奉存候、
随分御保養

御專一二奉存候、何卒
早急御全快

之程為天下

(47) 奉神祈候、

船越衛
委細者船越權大

丞殿より御承知

可被成下候、此段

御見舞為可

申上奉呈愚札候、

(48) 猶可奉期後便

之時候、恐惶謹言、

十月廿七日
石井兵部權少丞
(石井重之助)

大村兵部大輔殿

参人々御中

○

(12) 十月二十日
平尾兵部權
少丞書狀
一翰拝呈仕候、日増
寒氣差募候得共、

弥御安采被遊御座
(座)

珍重之御儀奉存上候、
然者御怪我之御模様
漸々御快氣之趣二者

(30) 承り及候得共、寒氣

差向候二付而者、嘸哉

御難渋可被遊と

奉察候、尚御養生

專一奉存上候、先者

此旨御容体御伺旁

(31) 為可得御意如斯御座候、

猶期後喜之時候、

恐惶謹言、

十月廿七日
平尾兵部權少丞

大村兵部大輔殿

御侍史

○

(13) 九月十日
廣澤兵部書狀
過日は不慮之儀

御艱難之尽、委曲

其御地より報知二而

拝承、陳者不堪驚歎、

可惡之賊徒早々捕縛

相成候様奉侍 併御疵
所も数ヶ所中、要脈
を除け候由、為

国家奉賀、何分御靖

安御加療万禱千禱

静間彦太郎

奉存候、静間彦太郎

其外療養中死亡

之儀、実以悲歎残念

至極奉存、御家来御同然

之分いかゝ候哉、先醒初

全快之所禱計御座候、

(54)

先者御見廻申上度

奉呈寸楮、何分御氣

壮ニ御療養奉專侍候、

恐惶謹言、

九月十日 廣澤兵助

拝具

大村兵部大輔様

侍史下

○

〔14〕
十七日
横山幾太兼景

(55) 秋冷弥増ニ被成候処、先以

御両殿様益御機嫌克

奉恐悦候、将又尊公様

此内之不虞之御難事

被為逢候由、於御国拝承

驚(標の誤り也)□之至奉存候、乍併

御薄手之様相聞聊奉

案心候、申上も疎ニ候得共、

精々御保護之程為

御国奉專侍候、委曲

(56)

笠原氏へ申託候、可相成

儀ニ候ハ、御様体被仰聞

候ハ、転聞之上案堵

可致様奉存候、先為

御見舞、忽々頓首、

(57)

十七日 幾太

一陳、幾重も御自重

之程專要奉存候

(上書)

「大村益次郎様

侍史

横山幾太

封

○



〔15〕

十月二十四日 御留守長官殿

河田兵部大丞

〔佐久馬書狀〕

人見大主典

を以御尋問ニ被

差向候間、左様

御承知宜御取計

被下度候也、

〔上書〕

〔墨引〕

十月廿四日

人見大主典殿

持参

病院ニテ

篠田竹藏殿

〔河田佐久馬〕

河田兵部大丞

○

〔16〕

九月十二日 奉拜啓候、然者

兵部權大丞

船越衛書狀

閣下去ル四日於

御旅宿不慮之

事ニ御出合、一昨八日

河田兵部大丞

河田五位・芳野少丞

より急報有之誠ニ

以驚愕仕候、嘸々

如何計敷、御憤

怒見ル如ク奉御察

上候、併御身上ニおいてハ

御氣遣無之趣、

医師よりも御容体

書を以報知有之候、

夫にて先ツ安心仕候

狼藉者何ク之

者歟ハ未タ不相知候得共、

飽迄も探索ヲ用ひ

必尋出し、乍恐

天威を可奉耀奉存候、

於

朝廷可奉申上や否、早速

其筋御瀉々江探索等

御命ニ相成精々

御穿鑿中に御座候

間、不日賊徒露頭

可仕奉存、此地之義

何も決而御懸念

被下間敷、只々奉願候ハ

閣下御療養

専一二御座候、幾重にも

御氣力強ク御快

愈之上御東行

奉願上候、委曲

内藤豊之助

御聞取可被遣様

(64)

奉願上候、右御見

舞迄以寸楮

奉得貴意候、

謹言頓首、

九月十一日

大村先生

閣下

洋之助
(船越)

○

[17]

九月十六日 拙墨

足立勘四郎

書状

奉呈仕候、秋冷之節

御坐候処、愈御壯健被

為居奉存恐悦至極候、

随而此度不容易御危

難被為当候趣、遥二

承奉大驚動候、中就

其後御容体等も諸説

粉々明弁致難、舍人

申合為御伺上京決論

発足仕候二付、書中同

様御伺申上度如是御座候、

(66)

誠惶誠恐、頓首敬白、

九月廿六日 足立勘四郎

再拜

大村大先生公

侍史

二伸、冷氣之折柄乍

影御加養御平癒奉

祈念候、以上、

○

[18] 十月二十日 任幸便一翰呈上仕候、

井上直景

(67)

然者過日者不慮之事

出来御怪我有之候由、誠二

驚愕之至二御座候、乍尔

為差事二も無之由、実二

天下之大幸と奉存候、

尚又右二付早速御伺旁

愚筆をも可推之処、政吉

参り候節も更二不存、夫

(68)

故意外之失敬申上候、此段

平二御海容奉願上候、

何卒早々御全快偏二

奉祈望候、申も疎之至二
御座候得共、御保養第一二
奉存候、先者為御見舞

如此二御座候、恐惶謹言

(68)

十月廿二日 井上金郎

直貞(花押)

一啓、幾重もく御保養

專一二奉存候、以上、

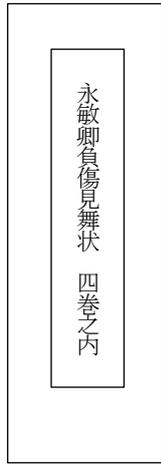
大村益次郎様

侍史

○

(70)

(卷子題箋)



大村益次郎
文書44

[19]

九月十四日

増田少丞書状

(71)

一筆啓上仕候、秋冷之節

御座候処、弥御安康無御滞

(72)

京師御着被成候由奉

恐悦候、誠二過日者於御

旅館不意之悪賊襲来

仕、及乱暴御大傷之由伝

承仕驚入申候、実二不分明

之世と者乍申、意外之醜

(73)

悪相働き、実以何レと申

上様無御座候、遺憾此時二

御座候、併不日二者右悪賊

召捕相成候様、於

朝廷も種々御手付半二

御座候、於我々も猶又速二

(74)

探索相届候様奉祈候、

大木喬任

大木四位東京府在勤中

二付、手掛り之者も有之哉二

候間、急々探索相届候様

乍不及示談仕置候、随分

(75)

御大傷之由二付、御養生専二

為

曾我祐準

朝廷奉祈候、此旨為御窺

曾我少丞被罷出二付、幸

(76)

便二依り御伺申上度呈

一書候、恐惶謹言、

九月十四日

増田少丞

大村兵部大輔殿

○

〔20〕
九月十三日
岡本孝承書狀
追啓

一翰奉拜啓候、然者去ル
四日夜御不慮之御儀二而
御怪我被為遊候由、恐憊
之至絶言語不堪悲憤奉
存候、折角御療養速ニ

御快復之段奉黙禱候
右ハ不取敢御容体奉窺候

頓首謹言

路之輔事

九月十三日 岡本孝承 (花押)

大輔様

侍史中

〔21〕
十月十七日
良輔書狀
尚々雪宮小切送申候
御紛レ迄ニさし上候也

不慮之御災難

驚愕之至、実ニ難

御堪唯々御怒張

無御座様奉万禱候、

畢竟御快気

御帰国奉希上候、

頓首、

十月十七日 良輔

大村先生

座下

〔22〕
九月十日
長松賢書狀
拝啓、過日者不慮之禍

(不時)

難ニ被為罹候趣承之、不地

驚駭候、即今如此賊徒

猶且海内ニ横行仕候儀、

朝廷之為実可詰難事

二御座候、最早蹤跡も相分候半と

奉察候、必竟私怨之所致

二無之、所由来之本源

有之儀下不地焦慮候、乍恐深

(ママ、何卒カ)

嘸慮も被為易御様子何率

一日も早ク御復古為国家

御画策日夜奉禱祈候、

時令も秋冷相成候、御創痍

も易治御事、実ニ神人

冥護と奉存候、先ハ為御伺

候申上度、此度長岡忠持被差向候

便宜呈一書候、草々頓首、

(文助・長松賢)

九月十日朝 長松文輔

大村兵部大輔様

吉富首之助
(兵部省作事
取給)

追而御病中奉恐入候得共、
陪從吉富首之助無恙候哉、
御序可然御伝配奉願候也、



〔23〕
九月十一日 先生倍御機嫌
中嶋四郎佐
衝書狀 克西京御滞在

被為在候由奉恭賀候、

然処先日ハ不慮之

御危難ニ被為懼候

段伝承仕、驚愕此

事ニ奉存候、去ながら

御安全被成御座候由

御自養最第一ニ奉

存候、御国より御見舞

之御飛脚被差立候

故、書中を以御伺仕候

且又此豕脂ハ洋人

魚類を食候節

揚油ニ遣ひ候物ニ而

試候処、至極宜敷

候故、乍些少奉献

候、其内御療養

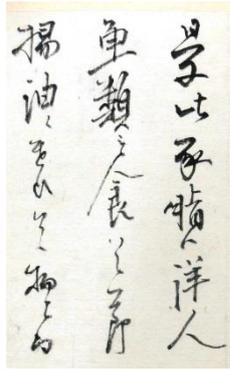
為国家奉祈上候、

御伺迄、草々、恐惶謹言、

九月十一日 中嶋四郎

大村先生

座右



〔24〕
九月十七日 一筆啓上仕候、然者
櫻井傳平書 過ル四日白暮頃、賊徒

共御旅宿江及狼藉

不慮之御災難誠以驚

愕之至、殊ニ少々御傷も

有之候御様子承り、山河

隔絶実ニ煩念痛心

御案申上候処、追々報知

も有之、彼是承り合候処

日々増御全快之御様子

ニ付千賀万慶仕候、申上者

疎ニ御座候得共、幾重も

被入御念保養之程、為

邦家深く奉祈上候、此上ハ

何卒御快く被為成

次第一先速ニ御帰国

夜白ニ奉渴望候、申上度

儀山岳ニ候得共、百里

外如何とも不能為、実ニ

筆頭之非所及、只奉期

拝顔之辰候、頓首敬白、

九月十七日 桜井慎平

拝

尚々於御留守へ至而

御壯健ニ被為居候間、此段ハ

少しも御掛念被成間敷候

可祝

大村先生

玉案下

○

〔25〕

九月十日

香齋三書

⑧ 拝呈仕候、陳者去ル四

日不慮之異変出来

之報承知仕、何とも

驚愕之至ニ奉存候、

乍併先生御

身上二者決而御

別条無之旨伝

承仕候、誠ニ以御高

運、

皇朝之御為大幸

此事ニ御座候、此上

⑨

者只々御療養專

一奉祈願候、只可

憐者静間君

ヲ始其他の死傷

何とも申上様無

静間彦太郎

三系美
岩倉貞視

御座、御心中奉

恐察候、右に付而者

⑩ 三系美 岩倉公ヲ始 有志

下我輩ニ至迄切

齒悲憤不知所言

次第此儀者吃下

⑪ 探索ヲ遂可申、

同志中申合、此節

頻リニ其手段相

尽候事ニ御座候、

少々者其手掛りも

出来候間、不日左右

ヲ申上候、一同憤歎

⑫ 官敷申上候様

申出候、先者各御

容体伺旁

言上如此御座候

頓首謹言、

⑬ 九月十日

〔上書〕

〔墨引〕

大村先生閣下

○ 拝玉

香川敬三

〽

〔26〕
十月十九日 寸緒ヲ以得御意候、時
三宮兵部權少丞(三宮義胤) 下寒氣相迫り候、弥以
畫狀

御健爽珍重此事ニ御座候、
扱其(後)御傷処如何共
御座候哉、頃日全体相疲
弱之趣、終始御困窮
之御事と奉恐察候、何
分千里有天時ニ不同
御容体頗ル不本意之段
御海容可被下候、方今至

急海陸軍事之義も、
先生御出京前御取建有
之御大綱ヲ挙、諸先生道
日勉勵有之候得共、一体
兵部之事、総而不挙
トハ人口喧事ニ御座候、何分
一日も早々御快気御出京
被下度、是而已奉企望候、
御変事后ハ暗夜ニ燈
ヲ失ひ候心地、一日安勤難
致、何卒少しも御快方ニ候

ハ、御上京被下度、唯様御
平臥被成候俛ニ而、難有御
苦勞ハ申迄も無之事、

乍併天下之事今日迄相

挙候得共、其実ハ今日より

以往之御所置ニ可有之と奉

存候、為国家と被思召、一日も

早く御出京拜待仕候、我

等之如き疾鈍如斯贅

言恐入候得共、難黙止微

衷不悪御對^(酌の誤り)被成

下候ハ、幸甚ニ候、早々頓首、

十月十九日 (三宮義胤)
三宮兵部權少丞

大村兵部大輔殿
閣下

〔27〕
九月十日 奉謹上候、西京御着
嘉三郎畫狀 後御清逼乍恐御奉

職被為在候処、過ル

四日黄昏、御旅館江

狼藉もの数輩乱入

及暴動、頗御鬪争

数ヶ処之御怪我御座
候得共、先御療治も

静間彦太郎
安達幸之助

出来尔、静間・安達両君
等ハ不残殮れ居候趣

飛書投来、実ニ不堪

驚愕切齒痛憤之

至奉存候、脱賊慥なる

手懸無之候得共、五條家

之筋ハ如何ニも糸口歟

決而従是綻ヒ可申候

此者ハ当時東京府

寺社懸リ於彼府も

離居候由、仮令九地

之下ニ潜ミ候共、探出

寸断其肉を食とも

飽足らぬ次第、頃日

木戸孝允

木戸先生未夕湯治

広澤真臣

中、廣澤君計、

前原一誠

尤前原君、林・堀等も

林幸友 半七

堀真五郎カ

帰来、孰れ出仕無之
候得共、一件探索ニ心を

碎居申候、申上も疎ニ

奉存候処、此上ハ御療

治専務速ニ御快復

為国家奉万禱候、

豊之輔

余ハ豊之輔より縷々

可申上候、恐惶敬白、頓首、

九拝

九月十日夜 嘉三郎(花押)

大村兵部大輔殿

閣下

〔28〕

十月十四日

小沢武雄書

寸楮拜啓仕候

寒冷之節御座

候得共、先以

閣下益御快方

被為渡珍重候、

至極奉拝賀候

当方ニ而も御容

体如何被為渡候哉

何も痛心仕居候処

尊我権

此間曾我先生

歸省、委敷

相伺、実二雀躍

仕候、追々寒

氣二も相趣候

得者、折角御保

護片時も速二

御東下被成下候

様、為邦家奉

祈念候外望

事無御座候、先

者御機嫌奉伺度

如是御座候、誠恐

誠惶、頓首、拝

十月十四日 小沢武雄

大從四位様

侍史御中

尚以時下実二

御自愛御全快

之程屈指御報

奉待候、当省

二而も先為差訳

も無御座候得共、

海陸軍御更

張之機会二相

膺り、

閣下不慮之御事

件殆天下之不

幸此事二御座候

御事毫相願

申かたく、

御賢察奉仰

上候、百拜、

○

(卷ノ題箋)

大村益次郎
文書 45

永敏卿負傷見舞状 四卷之内

〔29〕

十月十九日

香川敬三

船越衛書状

御見後必御火中々々、

寸楮奉拝啓候、時下

寒威相動候処、

先以閣下御疵

処、追々御快方被

為急候御様子具二

相承、一同大二安

心仕候、併病ハ愈ユル

に随狎候者に御座候

間、申上候迄も無御座

(10)

御自養專一奉念し

俦候、此地先ツ相

変義無御座、

省中無異

いづれも精勤

罷在候間、万御安

意可被成候、尤海

陸軍事不挙

二付而ハ世間百端

(11)

議論相生、毎々他之

諸賢哲より難問詰

言に逢ひ、謏劣不肖

之私共殆と困窮罷

在候、他之論亦為

皇国に候得ハ敢而答

ムルにも不及候得共、兼而

閣下御深謀御目

途之義御座候に付、一

細事と雖も変換

候得ハ毫厘之違千

里之誤と相成候テハ

不相濟と存、依旧

諸事取計居候得共、

何分軍事ハ今日

皇国之大御急務

乍恐

皇威之隆替ハ終ニ

軍事之盛衰ニ

有之義にて、中々私共

凡力之能候義ニハ無

之、何卒閣下

御病間御宿志之

御目途御報奉願

上候、御病中へ

ケ様之義申上候ハ一

層御病苦を御増候

と恐入候得共、愚衷

不報候も却而不心

中に付、御見

舞旁奉得

貴意度、如此御座候、

謹言頓首

十月旬九

再曰、追日寒氣

相増申候間、別テ

御療養專一

奉祈願上候

申上度海嶽

御座候得共、却而

奉煩御病中候

間、差扣居申候

百拜

乱筆御推

覽後御火中

奉願上候

兵部大輔公

閣下

敬三

洋之助

乍失敬以書中奉申上候、然者去ル

四日不慮之變動出来之趣

追々伝承仕り、驚愕之至り何共

言語ニ絶し候次第、嘸々御苦勞被

遊候御儀と乍恐御遠察申上候、併

先以御無事日ニまし御全愈之

御容体、実以御好運天下之御為

百大慶此事ニ御座候、呉々も折角

御加養專一と奉存候、今度公使御発

足ニ付、不顧失礼、以紙中御容体

奉窺候、頓首く、謹言

東京詰合

報国赤心両隊

九月十日 大久保忠尚

桑原虎次郎

富士武丸

大村兵部大輔殿下

公使之幸便ニ囑シ寸楮

奉呈仕候、就者去四日不図

賊氛襲来、種々御苦勞

被遊候趣追々伝承仕、何共

悲憤至極ニ御座候、併御身

上先以無御恙被為渡候段、

鬼神之保護ハ申迄も無

之候得共、真成ニ御好運之

御儀ト彼是申合大喜雀

躍無他事候、尚無御懈

怠御治療速ニ御全愈

賊類搜索

奉仕冀候、賊類搜索之

儀者於当地も乍不及勦励

罷在、段々糸口取出し候模様、必

然不日露頭之勢、実ニ潜賊

之寒胆おもひやられ候事ニ御座候、

香川大丞

尚委細者香川大丞より申上候間、御

聞取御放慮可被下候、先者為御容

体相伺度如此ニ御座候、恐々謹言、

九月十日

堀江権大録

春野(花押)

大村兵部大輔様

閣下

○

【32】

九月二十四

三宮耕麿書

呈寸毫得御意候、時下

寒冷弥以御機嫌克為

国家大悦仕候、拙者儀も兼

而若松在陣之所、漸此頃

帰京仕候、実ニ承り候得者、先

般者於御旅宿不慮之變

事有之、為流賊数ヶ所

手ヲ被為負候事愕然ニ候、

何共申上様も無之義ニ候、

乍去追々御傷も御快平

被成候由先々安心仕候、何分

早々御伺旁可仕候所、彼辺

地在留中、帰京之后承

り候様之次第、御海怒可

被下候、何分一日も早々御全

快御出勤無之而者兵部省

も相立不申、就中海陸軍

編制者今方之急務、先

生御尽力不被下以上者、此

上国家之安危如何と甚以

苦痛仕候、小子も不容易

賞典ヲ頂キ、唯兵馬之間ニ

狼狂仕候迄、不奉蒙御謹責

事、分外之僥倖前件之如

く過分之俸禄下し賜り候事

恐慄無此上、偏ニ老先

生之御恩庇多居と奉

感戴候、続而兵部権少

丞拝任、有名無実之号

此上宜敷御引廻し此而已

奉冀望候、何れ追々奉伺

.....

(13) 候得共、不取敢御安否相
伺候迄如是、頓首謹言、

九月廿四日 三宮耕庵(花押)

大村大先生

侍史御中

○

(33) 其後者御不沙

十月十七日 仁和寺宮嘉
彰親王書狀 汰二相成不本意之

事候、追而寒

冷增加候、倍御勇

健令賀候、扱御

重傷者如何候哉卜

(13)

日夜痛心罷

在候処、飛札

到来致承

知候へ者、脚疵

次第二重症二相

成候趣、不堪驚

愕嘸々御困

(13)

苦之儀と令遠

察候、就而八省ヨリ

兩人差登候間、

委曲御容体

可被仰聞候、尚

十分御保養

為天下所祈候、

(13)

先八取急御見

舞旁如此候也、

(13)

十月

(上書) 二十七日認

(墨引)

兵部大輔閣下

嘉彰

○

(34)

九月十三日 一筆奉拝呈候、時下

平尾伴之允
書狀

日増冷氣相催候処、益

御機嫌克被成御勤務

珍重之御儀奉存上候、然者

頃日者存外之異難紙上

二而言語難述上、何れ之

(13)

狼藉者歟乱入暴働候

始末承り、実二切齒不堪

残念至極奉驚入候、

嘸哉御残念ニ被思召
べくと奉存上候、乍併
御疵之儀ハ先異論

無御座、漸々御平愈

相成趣承り候得共、

夫而已御心配申上候

随分御保養專一奉

存上候、先者此旨不

取敢御伺まで為可

得御意、如斯御座候

猶期後便之時候

恐惶謹言

九月十三日 平尾伴之允
良廬 (花押)

大村兵部大輔様

御侍史



〔35〕
九月十七日 追日冷氣相催候処、益
柏村数馬書 状力

御安泰被成御滞京奉賀候、

然者過ル三日夜御旅寓江狼

藉者乱入不凶も尊体御

傷害之由、御容体精細致

承知、実ニ驚愕之至奉存候、
乍併追々被加御療養候ハ、
半御快方ニ可被為向御様子

二御座候由、為国家踊躍

馬屋原
此事ニ御座候、折柄馬屋原其外

御門生も居合奉侍仕候由、御

否強御加養可被成候、先者

御窺迄以寸楮拜啓仕候、

恐惶謹言

九月十七日 数馬

一抔、幾心も御旨重奉專禱候

別書先達而差出候処、東京ニ

御居合不被為在ニ而送り返し候処、幸

鄙意陣述之為呈上仕候間、

御病間ニ御一覽可被下奉冀候

頓首

益次郎様

〔36〕
十月十九日 以寸翰啓上仕候、寒冷
佐藤嘉七郎 (金巻) 書状

相募申候処、御病氣如何

被為在候哉御伺申上度、

然ハ先般京師御滞在

中事件、私国許御暇
在邑中粗伝承仕、不
取敢竊ニ美否相尋候処、

浮説ニ無之趣美ニ恐愕

至極甚歎息仕、日夜

不安既ニ頃日東帰仕候処、

曾我祐灌
曾我先生御地より帰着

に付、逐一御容体承り

暫氣得仕候、誠ニ御災難

之限り、無法無体嘸々

日々御昏苦之御事と

奉推察候、乍遠晩も

早々御平諭之程奉祈候、

且追而向寒ニ候間、御保

養専務ニ可被遊候、此段

任幸便ニ乍延引御伺申上候、

頓首

十月十九日 佐藤嘉七郎

大邑大先生

侍史

二百、御披見御六ツケ敷

可被為在と存候得共、寸志

御左右奉伺候度、畧文
御鴻覽可被成下候、以上

〔37〕
十月 一筆啓上仕候、寒冷
増少番薫
之節ニ御座候処、今程

御病体如何被為在

候哉、過日より御下坂之

ボドウィン
由承知仕、蘭医ホー

パウエン御養体相伺

御養生申上居候由、

勿論天下名医ニ付

随分御療養可申上

と者乍存、何分遠路之

御事故、如何ニモ御氣

快申上候、随分御大

病之由ニ付、御養生

専一ニ乍恐為天下

奉祈候、船越大丞

御養体為伺当

省より御差出ニ相成候

ニ付、為御伺呈一書、

頓首謹言、

十月 増田少丞

大村兵部大輔殿

【38】

九月十四日 一筆啓上致候、然ハ
久我陸軍少將
畫

本月四日ニハ実ニ不

存寄義出来、何

とも々々難申次第

但々驚愕寢食

相忘レ苦慮致候、

○

併頃日御養生

中先御快氣之

旨承り少々安慮

仕候江共、乍此上所

願何卒世事

暫時御打忘レ、但々

御保養專一奉

○

祈候、暴人之義ハ

早速取調居候、必

不日其罪ヲ可正卜

少しハ愉快之事ニ候

扱者早速家僕

差登シ御左右可

相伺処、御承知之

○

通無人乍不本

意以書中相

伺候、但々御快氣

之御事祈入

候、乍矢敬書中

荒々相同度如

此御座候、草々、

○

九月十四日

静間彦太郎

追而志津馬初二人

之人々も残念之

至、実ニ落涙致候

猶後便方可申述、

御病中愚札御

覧も甚堪怖候、御快

キ節侍史中より御

聞取可被下候、

草々、

「上書」
封

兵部大輔殿

呈侍史中

久我陸軍少將

○

【39】
十月九日
西村亮景

一筆拝呈仕候、小寒之

節ニ御座候へ共、先以御

揃被成、愈御健勝被為渡

候御事と奉大賀候、随而
私儀無事去月十六日

下着仕候、乍憚左様御放意

可被仰付候、扱御病氣此

頃者如何被成候哉、御続

被成御快方之御事と奉

欣賀候、尚厚御加養被成

度御専用ニ奉存候、誠ニ在勤

中不一方御懇命を蒙り、

万事御示諭被仰付難

有仕合ニ奉存候、御礼

筆紙難尽、私より者始終

失敬而已相働、何共汗

顔之仕合多罪幾重も

御仁恕被仰付度奉存候、

此頃者浪花中も次第

御運ニ相成候哉と奉大慶候、

其内東京ニ而者肥後人

外国公使へ及狼藉候哉

ニ承り、既ニ今夏之御談判

之続も御座候而、別而御手

煩と相成可申、将蝦地も何

乎御混雑哉之趣、別而

何角御配慮御心痛

も被為在候哉と奉察候、只

偏ニ御病氣御保護御專

一二奉存候、私儀も帰着後
徒然ニ罷在素志ヲ難伸、

旁上坂仕度奉存候へ共、当時

一体他国修行等も被差

留置候、旁身動候も不相成

空敷頃日罷在候、心事

御洞察被仰付度何角

申上度奉存候へ共、逆も紙

上ニ難尽先者時季尙

旁呈惠札候、尚期後

便之時候、誠惶頓首、敬白、

十月九日 亮吉(花押)

大村先生

侍史

二百、時候、為国家厚

御保護御專一二奉存候

乍憚御都合も御座候へ、

桜井先生江も宣敷

御伝声被仰付、最早

御上京ニ相成所候哉、何卒

御都合も御座候へ、不苦儀

者御洩し被仰付可被下候、

恭々謹言

大村様



(終)